

標

古語拾遺

完

特32
977

001508-000-5

特32-977

古語拾遺

小田 清雄/注

M24

ACB-3983



小田清雄先生集註

標註 古語拾遺 完

大阪 國文館藏版

○加序 龍熙近云序者舒也所以舒三展已意也加序義同并序以三序題略為本文題故云云
○前書往行 又謙辭○前書往行易其德也
○浮華 漢書勿取浮華
○綱解 實者云云
○世代 龍氏云王者易姓受命為一世又父子相代為一代神皇正統記明示代世異
○故實 文選曲

標註 古語拾遺 小田清雄集註

古語拾遺一卷加序從五位下齋部宿禰廣成撰

蓋聞上古之世未有文字貴賤老少口口相傳前言往行存而不忘書契以來不好談古浮華競興還嗤舊老遂使人歷世而彌新事逐代而變改顧問故實靡識根源國史家牒雖載其由一二委曲猶有所遺愚臣不言恐絕無傳幸蒙召問欲摠畜憤

校正 古語拾遺 二 國文館藏版

水時序の註に先王之道也云云史記の註に故事の是者也といへり
○國史 朝廷に御記録
○家牒 臣下の家々の
記録○一二 龍氏云一
二謂委曲也今云一
二委曲合註辭者也
○敢 勇也○一聞 或
は聞くと云ふが如し○
開闢 天地の開闢を云
ふ次下に天地剖判之初
と記し他の古書にも
天地初判天地混成之時
かき種々の漢語に撰た
れど唯弘く此世中の草
創の時と云義にて今見
る天地の濫觴といふ義
にあらざる其考證言長
れば略す○大八洲國
大倭豊秋津島(東は陸
奥より西は長門に至る
迄の一大嶋也)伊豫の
二名の洲(今の四國也)
淡路洲筑紫の洲(今の
九州也)壹岐の洲對馬
隱岐の洲佐渡の洲の八
箇也國生の事に就ては

故錄舊說敢以上聞云爾

一聞夫開闢之初伊弉諾伊弉册二神共

爲夫婦生大八洲國及山川草木次生日

神月神最後生素戔鳴神而素戔鳴神常

以哭泣爲行故令人民夭折青山變枯因

斯父母二神敕曰汝甚無道宜早退去於

根國矣又天地剖判之初天中所生之神

名曰天御中主神次高皇產靈神賀古美武

須比是皇親
神留伎命
次神皇產靈神是皇親此神子

天兒皇命即中
其高皇產靈神所生之女

名曰栲幡千千姬命天之祖津彦其男名

曰天忍日命大伴宿又男名曰天太玉命

禰部宿
太玉命所率神名曰天日鷲命阿波

國忌部
手置帆負命國忌彦狹知命

紀伊國忌
櫛明玉命山雲國玉天目一箇

命統於是素戔鳴神欲奉辭曰

六人部是香翁大國隆正
翁の精説われ迄長けれ
ば略す○山川草木
論語云犁牛之子騂且角
云々山川其舍諸註云山
川山川之神也人雖不用
神必不舍也○日神
下到天照大神と自註せ
り○月神 月讀命也○
哭泣 大聲を哭と云ひ
細聲を涙有ると云ひ
云ふとぞ○夭折 不
盡ニ天年一日天中絶日
折とぞ○青山變枯 繁
茂セル草木を枯して枯
山と云ふを云ふ○根國
地胎に在る國也とぞ
○皇親 スメヲは
歴代の帝を一つにして
申す稱也ムツは陸史法
ひ義にて生みの父母に
かはらす思召す意也○
天祖 天孫に對して天
にまを御祖と申す稱也
故に天照大神をも香勝
尊より彦瀲尊までをも
申せり
○於是 又天地剖判之
初云々の一段を隔て上
かる早退去於根國矣を

承けたるあり○奉昨日
神父母二神の勅に従
ひ根國に就まさんとす
るによりて姉尊に見ゆ
まさん爲也○瑞八阪瓊
之曲玉 瑞は物の美を
はむる言也八阪之借字
にて彌真明アハヤの義
あり曲玉は字の如く曲
れる玉あり○誓約 此
字の如くかれと又祈ノ
字を書きたる所有り且
徧ウツケヒと云事の例
を考ふるに誓約意新る
意トム意あを兼たる
詞也○鍾愛 鍾は聚也
と字書に見えたり○無
狀 後漢書注に其罪惡
尤大無可寄言故云
無狀ありとぞ○凌侮
凌は犯也侮は慢也輕
也○注せり○毀畔
アハアセの本語也一筋
あるをアといひ堅に横
にまじりたるをアセと
云也されば順集に苗代
水にぬれてつくるア躬
恒集に苗代のアをだに

神天照昇天之時櫛明玉命奉迎獻以瑞
八坂瓊之曲玉素箋鳴神受之轉奉日神
仍共約誓即感其玉生天祖吾勝尊是以
天照大神育吾勝尊特甚鍾愛常懷腋下
稱曰腋子可今俗誤稱子謂和其後素蓋鳴
神奉爲日神行甚無狀種種凌侮所謂毀
畔波古那語阿知埋溝古語美放樋波古那語重播
伎古麻語伎志刺串古語佐志久生剝逆剝屎戶天如罪

いまだつくりざりけり
なごよみてありこは
苗代は畔をばあつ事を
いへる也されば神代紀
に春則毀畔とあり○埋
溝 溝を埋て水のかよ
ひを止る也アハナツは
水を散す也○放樋 ア
ハナチとひとしく是も
水を散し棄るありアハ
ナチは苗代の水を散し
て生立しめざる也是は
五月の植付を春のうち
に妨置義也○重播 人
の種を播置ける苗代へ
又播て幼る也稻の苗代
へ神を播てこみしあ
るべしさて此四つは春
の事也○刺串 是は前
の四つに對へて秋をい
へる也神代紀に秋則
挿レ籾伏馬云々どあり
申と多く隠刺去て下立
難からしむる也○生剝
逆剝 古事記に穿天班
服屋之項逆剝天班
馬剝而墮入とある是
也生剝も逆剝も一事を
るを文勢をかさねいへ
る也と縣居翁いはれた
れどいかにあらん本居
翁六人部翁あとの考有

者素或鳴神當日神耕種之節竊往其田
刺申相爭重播種子毀畔埋溝放樋當新
以投之室內以此屎塗戶當今室中之時逆剝生
神之源也起於 于時天照大神赫怒入于天石
窟閉磐戶而幽居焉爾乃六合常闇晝夜
不分群神愁迷手足罔措凡厥庶事燎燭
而辨高皇產靈神會八十萬神於天八湍
河原議奉謝之方爰思兼神深思遠慮議
曰宜令太玉神率諸部神造和弊仍令石

れど其説長ければ之引
出でせ○屎戸クッペと
よみて龜をけがしたる
事に見るべし尿を家内
に散せば龜を汚す也是
は古事記に於て開看大
嘗一殿尿麻理散とある
にて龜を穢す罪ある事
を悟るべし○六合上
下四方を云ふ○和幣
テはタへの納也タへは
絹布の總名をこれとて、
は凡て神に奉る幣物を
云へり○日像之鏡 日
神の大御身の御光の如
く照明ある鏡と云也○
青和幣 麻の色木綿に
比すればや、青と故也
○白和幣 其色白けれ
ば云ふ○五百箇は玉の
數也統は其玉を一緒に
貫きて統括りたる也○
天御量 物を量る由の
名にて即尺度の類を云
ふ斤の字も借字にて

凝姥神鏡天作遠祖命之子取天香山銅以鑄
日像之鏡令長白羽神俗伊勢國麻績祖今
種麻以為青和幣古語爾令天日鷲
神津咋見神穀木種殖之以作白和幣是木
一掃夜也己上二物令天羽槌雄神倭文遠
織文布令天棚機姬神織神衣所謂和衣
仗古多語倍爾令櫛明玉神作八坂瓊五百箇御
統玉令手置帆負彥狹知二神以天御量

此は物を指量る故の名
也大は一丈を云ひ小は
一尺を云ふべし○ミツ
ノミアラカ ミツは既
にいへりアラカと在所
の義にて即宮殿比稱也
○五百箇眞賢木イホツ
は枝葉の繁さを云ひ眞
は美稱也○攝 サチコ
シノチコシニシテと訓
ひサは美稱チコシは根
ちがら堀取るをいふ今
吾堺市をよにては根コ
シといへり○眞辟 俗
にツルマサキと云草を
りと子髪は髪連の義也
カツラもツズもカザシ
も原ハ神靈のやどりた
まふ料に物せしめる事
六人部翁の精説あれど
例の略しつ

大之小斤名也雜器 伐大峽小峽之材而造瑞殿
美古阿良可兼作御笠及矛盾令天目一
箇神作雜刀斧及鐵鐸古語佐其物既備
掘天香山之五百箇眞賢木古語能禰居自
而上枝懸玉中枝懸鏡下枝懸青和幣白
和幣令太玉命捧持稱讚亦令天兒屋命
相副祈禱又令天鈿女命古語天乃於須
謂固之故於須志此今緣也強女 以眞辟葛為鬘以

○蘿葛 此物日の當らざる山中に生ずる故に云○手草 手に取持つ草と云義○岩簪槽 記紀にもウケとあり其上に立て舞ふに踏むを空わらしむる爲に中を空虛ウツに設けたる臺にて空筒ケツの義あり此の注にウケフ子とあるは後にウケたる名を古語と心得たる也昔の字を加へて採約の意と云へるも甚誤也○俳優 ワザチキといふ語に填たる漢字也語義は事業をして招請あり一タクとは招く意にて日本紀の此條は關造、彼神、象、奉、招請と見ゆ火折尊の段に風招と云ふ事有り此段の玉鏡の事を古事記にチキシ八尺之勾玉鏡と有り一日神を招請奉れる故云へる名あるを後には凡て面白

蘿葛爲手繼比可氣者以竹葉飫憩木葉爲手草今多手持着鐸之矛而於石窟戸前覆誓槽古語宇氣布舉庭燎巧作俳優相與歌舞於是從思兼神議令石凝姥神鑄日像之鏡初度所鑄少不合意是紀伊國次度所鑄其狀美麗大神也儲備既畢具如所謀爾乃太玉命以廣厚稱詞啓曰吾之所捧寶鏡明麗恰如汝命乞開戸而御

く可笑き業をさそと云ふこと、成れるは轉りし也○上文に宜太玉命率諸部神云々と云ふよりこの相與歌舞まで皆思兼神の請にて其請の如く行ひし事をば省さし也そは下文に儲備既畢具如所請とあるにて知るべし○日御綱日神の御殿に懸る故の稱名ありといへどいかいわらむ○シリクメナハ 名義尻籠繩といふ説は信られず予が物せし此書の請義に六人部翁の精説を引置けり日影之像也の註も信け難し○久志備 此は尋常の御子の如くならず殊に奇異なる事に由りて生ましし由ありとぞ

覽焉仍太玉命天兒屋命共致其祈禱焉于時天照大神中心獨謂比吾幽居天下悉闇群神何由如此歌樂聊開戸而窺之爰令天手力雄神引啓其扉遷坐新殿則天兒屋命太玉命以日御綱今斯利久迷迴懸其殿令大宮賣神侍於御前是太玉命間戸命櫛盤間戸命二神守衛殿門是並玉

命久美志詞和所君臣間令宸標内侍豐盤

校正 五二 國文 官 殿 反

○阿波禮云々 アハレ
 は見る物聞く事に心の
 動きて出る歎息の聲に
 ノの添ひたるにて此條
 のは稱譽て云アハレ也
 自注に言天晴也とある
 は信難しこ、はアマハ
 レにては聞ゆべけれど
 推古天皇紀なる旅人ア
 ハレと云アマハレにて
 は解難し大國翁云古語
 事之甚切智稱阿那とい
 へるはよーオモシロシ
 マノシなどの説はより
 難し云々これらのアハ
 は喜ぶ心より歎息とあ
 りて出る聲也香川景樹
 云古語拾遺に擧たる古
 語と云物は大やう廣成
 の遺意に出て牽強附會
 の説のみよして取るべ
 き事尤少し○千座置戸
 罪有る人ノ所有物を出
 さしめて之を破物とし
 其物を置く器を置座と
 云ふ

命也之 當此之時上天初晴衆俱相見面皆
 明白伸手歌舞相與稱曰阿波禮言天阿
 那於茂志呂阿古語事之甚切明白也阿那多
 能志言伸手而舞今指樂事阿那佐夜阿那
 能志言伸手而舞今指樂事阿那佐夜阿那
 日勿復還幸仍歸罪過於素戔嗚神而科
 之以千座置戸令拔首髮及手足爪以贖
 之仍解除其罪逐降焉素戔嗚神自天而

千座は其數の甚多き由
 あり置戸は置座と云ふ
 が如し即破物をいふ○
 天十握劍 古典に見え
 たる天といふ言に數義
 あると清雄が譯義にい
 ひおけり此靈劍はも
 と天上にあり造物も
 天れといへり十握は手
 にて十握はとある長を
 云○八岐大蛇 此蛇を
 古事記には身一有八頭
 八尾と見ゆ○娶國神女
 大山津見神の子足名
 椎神の女奇稻田姫あり
 ○常世國 垂仁天皇紀
 に常世國則神仙秘處俗
 非所臻と見えたるが轉
 りてはたやすく往來し
 難き外國をも云へり愛
 と齊衡三年の此神の神
 託と據りて想ふに外國
 あり

降到於出雲國簸之川上以天十握劍其
 其尾中得一靈劍其名曰天叢雲大蛇之
 乃獻上於天神也然後素戔嗚神娶
 國神女生大己貴神古語於神保遂就於根
 國矣大己貴神一名大物主國魂一名大國
 與小彥名神高皇產靈
 三和國神是也郡大

○戮力一心經營 古事記に神産日命の御言に爲兄弟而作堅其國と見ゆ二柱神相並而作堅此國とも有り○蒼生万民を云ふ○蒼生人家に畜ふ鳥獸を云ふ○禁厭之法 まじなひ也○百姓 人民を云ふ○恩頼 日本紀纂疏云謂利澤之可類云々○皇孫命 スメイトは此一地球を統知看す眞實の御子と稱す義にて吾勝命を始め御歴代の天皇を稱し奉る也然るに之を皇孫と書き二神之孫故曰皇孫と注せるは後に字に就ての既にて古意にあらざれば古くはヒコとこそいへれマコとは云はざり皇孫又天孫などの字は其義もて替けるあり

也國共戮力一心經營天下爲蒼生畜産定療病之方又爲攘鳥獸昆虫之災定禁厭之法百姓至今咸蒙恩頼皆有効驗也天祖吾勝尊納高皇産靈神之女栲幡千千姫命生天津彦尊號曰皇孫命高天照大神産靈故曰皇孫之孫 既而天照大神高皇産靈尊崇養皇孫欲降爲豐葦原中國主仍遣經津主神是總磐國筒香取神之是也今武甕槌神是

○驅除平定 惡神也もを驅逐ひ除去り國中を平カにし定め治むる義あり

○天孫 古事記に天神之御子と有る義也それを漢語ふて簡に書ける也

○遂隱 日本紀には於八十限將隱去古事記には於百不足八十期手隱而侍と有り幽界に隠れさせたる也

○寶祚 天皇の御位あり

既而天照大神高皇産靈尊崇養皇孫欲降爲豐葦原中國主仍遣經津主神是總磐國筒香取神之是也今武甕槌神是神及其子事代主神並皆奉避仍以平國予授二神曰吾以此予卒有治功天孫若用此予治國者必當平安今我將隱去矣辭訖遂隱於是二神誅伏諸不順鬼神等果以復命于時天祖天照大神高皇産靈尊乃相語曰夫葦原瑞穗國者吾子孫可王之地皇孫就而治焉寶祚之隆當與天

○天壤 天地也 ○八咫鏡 八は借訓にて彌の義 咫は開手にて兩手を開きて并べたるほどの大きさの鏡也

○齋鏡 大御神の神體として齋奉れど御事也

○天津神籬及天津磐境 ヒモロギは日本紀私記に蓋賢木之謂歟と見たり賢木を刺立て神の御室と云ふ云ふ名義は本居大平説に三室木と云ふ神の坐す所を御室と云ふ萬葉三に我屋處に御諸を立て云々卷七に木綿かけて祭る三諸のちど有りといへり

○磐境 を祭る地を磐もて築固めて造れるをいふとぞ清雄按磐は

齊の義をめぐりサカの義はまた思ひえねば熟考へてん

○八十萬神 上に見ゆるは異にして葦原中國あるを云ふ ○仗兵器也 ○先驅 文選の注云天子行以靜道也

八達之衢 八は例の彌にて數多きを云ふ衢は道侯にて天より降る道の幾筋にも分れたるを云ふ久保季茲氏云天と地との中間は虚空にて何も無かるべきに似た

壤無窮矣卽以八咫鏡及草薙劍二種神寶授賜皇孫永爲天璽所謂神璽也之矛玉自從卽敕曰吾兒視此寶鏡當猶視吾與同牀共殿以爲齋鏡仍以天兒屋命太玉命天鈿女命使配侍焉因又敕曰吾則起樹天津神籬比神籬者古語及天津磐境當爲吾孫奉齋矣汝天兒屋命太玉命二神宜持天津神籬降於葦原中國亦爲吾孫

奉齋焉惟爾二神共侍殿內能爲防護宜以吾高天原所御齋庭之穗是稻也亦當御於吾兒矣宜太玉命率諸部神供奉其職如天上儀仍令諸神亦與陪從復敕大物主神宜領八十萬神永爲皇孫奉護焉仍使大伴遠祖天忍日命帥來目部遠祖天穗津大來目帶仗前驅既而且降之間先驅還白有一神居天八達之衢其鼻長七

れども天にも國にも氣
有りて充満せれば其氣
中に道筋有る事水中に
水脈有るが如く其脈々
を歩みて降る事と覺ゆ
る也○七咫 咫は八咫
鏡の下に云へる如く手
を閉きたる大さあり○
眼如八咫 眼の大にて
睨きたる形状をいへる
あり○咲 漢書注に
咲謂唇舌之中大笑則
見とあり嘲笑ふ義なり
とぞ

咫背長七尺口尻明曜眼如八咫鏡即遣
從神借問其名八十萬神皆不能相見於
是天鈿女命奉敕而往乃露其胸乳押下
裳帶於臍下而向立咲矇是時衢神問曰
汝何故爲然耶天鈿女命反問曰天孫所
幸之路居之者誰也衢神對曰聞天孫應
降故奉迎相待吾名是猿田彥大神時天
鈿女命復問曰汝應先行將吾應先行耶

○啓行 詩注に啓、開
也行道也と有り

○筑紫 西海九國の總
名日向は今の日向縣
三州の地あり○高千穂
之穂觸峯 今の霧嶋山
なること六人部霧の日
向國神考に明徴六つ
擧げられたり○發顯
如何ある神とも知られ
ざりしを問きて其れ
と顯はし、を云ふ

對曰吾先啓行天鈿女命復問曰汝應到
何處將天孫應到何處耶對曰天孫當到
筑紫日向高千穂穗觸之峯吾應到伊勢
之狹長田五十鈴川上因曰發顯吾者汝
也可送吾而致之矣天鈿女命還報天孫
降臨果皆如期天鈿女命隨乞侍送焉
以群神奉敕陪從天孫歷世相承各供其

氏女命者彼男女皆遠爲娘女君此緣也
是

○媯 字書娶也とあり
○廣育 字書に天子生
也とも産育生育とあり
熟用すれば生れ給ふ事
を云ふ
○神武天皇 彦瀲尊
第四の皇子にて御幼名
を挾野尊と申し後に天
下を撥平けて大和國に
都を奠き給ひしかば神
日本磐余彦天皇と稱し
、事誰も知り奉れるが
如し○東征 征孟子に
上伐下也といへり○
督將元戎 督將は諸軍
の將校を云ひ元戎は其
衆士卒を云ふ○剪除兇
渠 凶賊の渠帥たる兄
渠を始め八十島師が類
をて順はさる徒を剪
り除きしを云ふ○殺虜
帥衆 順官軍 ぬれば
長體彦を殺し其衆を帥
て皇軍に順ひ給ひしを
云ふ

職天祖彦火尊媯海神之女豐玉姬命生
彦瀲尊誕育之日海濱立室于時掃守連
遠祖天忍人命供奉陪侍作箒掃蟹仍掌
鋪設遂以為職號曰蟹守者今彼國之轉也
逮于神武天皇東征之年大伴氏遠祖日
臣命帥督將元戎剪除兇渠佐命之勳無
有比肩物部氏遠祖饒速日命殺虜帥衆
歸順官軍忠誠之効殊蒙褒寵大和氏遠

○迎引皇舟云々奉導宸
駕云々おの事は巻尾
に註せん
○妖氣 字書に妖災也
また異也摩也と注せ
り○風塵 風吹きて塵
を揚ぐるを以て不順の
徒有て世の靜ならぬを
譬へし也○都 宮處の
義にて天皇の大宮ある
所を云ふ○經營 時の
注に經營度也經營爲也
とあり○所謂云々此
は祝詞の文を引きたる
也其義と祝詞請義にい
はん

祖椎根津彦者迎引皇舟表績香山之巔
賀茂縣主遠祖八咫鳥者奉導宸駕顯瑞
菟田之徑妖氣既晴無復風塵建都橿原
經營帝宅仍令天富命之太孫玉命率手置帆
負彦狹知二神之孫以齋斧齋鉏始採山
材構立正殿所利立高天乃原爾搏風高之
利豆皇孫命乃美豆故其裔今在紀伊國
乃御殿乎造奉仕也
名草郡御木麩香二郷古語之鹿香採材齋

○是其證也 古傳ある
 此みちらに現に然る地
 名あるは其古事ありし
 證也と云へるにて古傳
 の成麻からぬを證せる
 あり○齋部諸氏 鑄造
 玉作木綿作を始り種々
 の物を造る氏なり○美
 保伎玉言祈禱也 其
 は祈る意また壽實はふ
 禱あり祈禱と注せるは
 祈の字を用ゐたる方に
 就てなり○アヲタヘ
 荒く織たる布にて和妙
 に對せり○肥饒 其地
 氣の肥て物の饒く出來
 る土地あり

部所居謂之御木造殿齋部所居謂之鹿
 香是其證也又令天富命率齋部諸氏作
 種種神寶鏡玉矛盾木綿麻等櫛明玉命
 之孫造御祈玉古語美保也其裔今在出
 雲國每年與調物貢進其玉天日鷲命之
 孫造木綿及麻并織布古語多阿仍令天富
 命率日鷲命之孫求肥饒地遣阿波國殖
 穀麻種其裔今在彼國當大嘗之年貢木

○沃壤 潤澤也美
 土地也○東土 東方
 諸國也

○古語麻謂之總也 香
 川氏云麻をフサといひ
 し事古も今も見しるこ
 とな所かし古語拾遺に
 擧たる古語といふもの
 大やう廣成の遺意に出
 て牽強附會の説のみに
 してとるべき事尤少し
 といへり此國の名義清
 雄が僻案あれどもだ思
 決めねば猶熟考してん
 ○神戸 神社に附きた
 る民戸あり戸は家を云
 ふ戸は籠にて家には必
 籠有ればあり○調庸

綿麻布及種種物所以郡名爲麻殖之緣
 也天富命更求沃壤分阿波齋部率往東
 土播殖麻穀好麻所生故謂之總國穀木
 所生故謂之結城郡古語麻謂之總也今
 也阿波忌部所居便名安房郡今安房是也天
 富命卽於其地立太玉命社今謂之安房
 社故其神戸有齋部氏又手置帆負命之
 孫造矛竿其裔今分在讚岐國每年調庸

毎戸より其土地の出る所の物品を貢獻するを調と云ひ又毎年力役する定則ありて其代りに物を進るを庸と云ふ庸を力伐ツカサとよめり

○内物部 朝廷に親しく仕奉る物部と云ふ

之外貢八百竿是其事等證也爰仰從皇天二祖之詔建樹神籬所謂高皇產靈神皇產靈魂留產靈生產靈足產靈大宮賣神事代主神御膳神已上今御也櫛磐間戸神豐磐間戸神已上所奉齋也生島八是洲大之靈今生嶋也生摩坐是大宮地之靈也今日臣命帥來目部衛護宮門掌其開闔饒速日命帥內物部造備矛盾其物既備天富命

○大幣 下文に陳幣とある是也神祇令云天皇即位總祭天神地祇云々其大幣者三月之内令修理訖義解云大幣者供神幣物各有色目一金水桶金線柱奉伊勢神宮猶戈奉住吉神之類也

率諸齋部捧持天璽鏡劔奉安正殿并懸瓊玉陳其幣物殿祭祝詞在其祝詞於別卷次祭宮門在其祝詞於別卷然後物部乃立矛盾大伴來目建仗開門令朝四方之國以觀天位之貴當此之時帝之與神其際未遠同殿共牀以此爲常故神物官物亦未分別宮內立藏號曰齋藏令齋部氏永任其職又令天富命率供作諸氏造作大幣訖令天

○靈時 谷川十清云齋場也司馬相如封禪文。溜々之麟游_ニ彼靈時_ニ孟康註時神靈之所_レ止也韻會_ニ時天地五帝所_ニ基業_ニ祭地_ニ○鳥見山 大和國城上郡外山村に在り○皇天 皇祖天神あり○禮祀 詩註云精意以享_ニ謂_ニ之禮_ニ祀_ニ郊禋也○秩群望 書舜典云望_ニ秩山川_ニ注云東岳諸侯竟內名山大川如_ニ其秩_ニ望_ニ祭_ニ之謂五岳牲禮祝_ニ三公_ニ四饋祝諸侯其餘如_ニ伯子男_ニこれを取りたるをれを實はたい神等を徧く祭給ひし由をれば文字も深く拘はるべからせ○磯城瑞垣朝 崇神天皇の御代あり

種子命命天之見孫解除天罪國罪事所上既天罪訖
訖國罪者國中人民所犯爾乃立靈時於
鳥見山中天富命陳幣祝詞禮祀皇天徧
秩群望以答神祇之恩焉是以中臣齋部
二氏俱掌祠祀之職媛女君氏供神樂之
事自餘諸氏各有其職也至于磯城瑞垣
朝漸畏神威同殿不安故更令齋部氏率
石凝姥神裔天目一箇神裔二氏更鑄鏡

○踐祚 神祇令云踐祚之日謂天皇即位謂_ニ之_ニ踐祚_ニ祚_ニ位也福也云々
○磯城 石城の義にて磐城と同じとぞ 々は圍める地をいふ
○宮人 朝廷に仕奉る宮人等あり○ミヤヒト
ノ 宮人之也○オホホノ スガラニ 大終夜に也
○イサトホシ 此句解しがたし○ユキノヨロシモ 此句もどきがたし○オホホノスガラニ 同し事を打返して云ひしにて古歌常に多し○今俗云々 大同頃に歌ひし也○オホホノヨロモ 大装衣也○ヒザトホシ 大装衣の長くして膝下まで通至れるを云ふ○ユキノヨロシモ

造劔以爲護身御璽是今踐祚之日所獻
神璽之鏡劔也仍就於倭笠縫邑殊立磯
城神籬奉遷天照大神及草薙劔令皇女
豐歛入姬命奉齋焉其遷祭之夕宮人皆
參終夜宴樂歌曰美夜比登能於保與須
我良爾伊佐登保志由伎能與呂志茂於
保與須我良爾
志由伎乃與侶志茂於保
與會許侶茂詞之轉也
又六年祭八十

往の宜にて往く状貌を愛でしあり田舎の賤が大宮人の袖付衣を羨みてよみしあるべし○天社國社 天神の社國神の社といふ事也○神地 神領の地を云ひ神戸は神領の民戸なり神祇令云出神戸、調庸及田租者并充下造、神宮及供神調度○男耳調弓にて射獲たる獸肉また其皮などの類を賣るを云ふ○手末之調女の手にて作れる物にて絹布などの類を賣るを云ふ○卷向玉城朝垂仁天皇の御代あり

萬群神仍定天社國社及神地神戸始令貢男弭之調女手末之調今神祇之祭用熊皮鹿皮角布等此緣也泊于卷向玉城朝令皇女倭姬命天皇第二皇女母皇后狹穗姬奉齋天照大神仍隨神教立其祠於伊勢國五十鈴川上因興齋宮令倭姬命居焉始在天上預結幽契衢神先降深有以矣此御世始以弓矢刀祭神祇更定神地神戸又新羅

○繼向日代朝 景行天皇の御代あり○東夷東國より蝦夷までを云ふ

○徒行 御身の護なる貴重の劍を帯びて行きたまひしを云ふ○吹山 近江に在りて美濃に跨りたり○中神の毒氣に中り給ひしを云ふ○磐余稚櫻朝神功皇后攝政の御時あり○住吉大神廟 皇居を守りて三韓を征し皇國々を巡見して仕可き

王子海檜槍來歸今在但馬國出石郡爲大社也至於纏向日代朝令日本武命征討東夷仍枉道詣伊勢神宮辭見倭姬命以草薙劍授日本武命而教曰慎莫怠也日本武命既平東虜還至尾張國納宮簀媛淹留踰月解劍置宅徒行登膽吹山中毒而薨其草薙劍今在尾張國熱田社未叙禮典也至於磐余稚櫻朝住吉大神顯

地を覓め給へるを云ふ
故に此大神をアラヒト
ガミと申すは人と願れ
まし、義ありとぞ○輕
島豐明朝 應神天皇の
御代なり○博士 書を
讀みて博く事物を知る
由の稱也○文首 姓也

○後磐余稚櫻朝 履中
天皇の御代也

○奕世 奕は累にて御
代御代あり

矣征伏新羅三韓始朝百濟國王懇致其
誠終無欺貳也至於輕嶋豐明朝百濟王
貢博士王仁是河内文首始祖也秦公祖
弓月率百廿縣民而歸化矣漢直祖阿知
使主率十七縣民而來朝焉秦漢百濟内
附之民各以萬計足可褒賞皆有其祠未
預幣例也至於後磐余稚櫻朝三韓貢獻
奕世無絕齋藏之傍更建内藏分收官物

○長谷朝倉朝 雄略天
皇の御代あり

○檢校 日本紀にカム
ガヘシムと訓せり字書
に檢校也校檢也也
注せり

仍令阿知使主與百濟博士王仁記其出
納始更定藏部至於長谷朝倉朝秦氏分
散寄隸他族秦酒公進仕蒙寵詔聚秦氏
賜於酒公仍率領百八十種勝部蠶織貢
調充積庭中因賜姓字豆麻佐言隨積埋
秦絹 氏 絹 於 賦 賦 秦 字 謂 之 波 陀 仍 以
緣 也 機 矣 織 之自此而後諸國貢調年年盈溢
更立大藏令蘇我麻智宿禰檢校三藏藏

○東西文氏 令義解云
在皇城、東西故曰東
西也、東は大和、西は河
内、なれば東西を即ヤ
トカフナト訓む

○小治田朝 推古天皇
の御代也

○難波長柄豊崎朝 孝
德天皇代御代也○神官
頭 神祇の事を掌る官
の長官あり○王族 宮
内省正親司の職也○禮
儀 中務省内禮司の職
也○婚姻 治部省の職
也

大内藏 秦氏出納其物、東西文氏勘録其簿、
是以漢氏賜姓爲内藏大藏令、秦漢二氏
爲内藏大藏主、鑰藏部之縁也、至於小治
田朝、太玉之胤不絶、如帶天恩、興廢繼絶、
纔供其職、至于難波長柄豊前朝、白鳳四
年、以小華下諱齋部首作賀斯拜神官頭、
伯今也神祇 令掌叙王族宮内禮儀婚姻卜筮
事、夏冬二季御卜之式始起、此時作賀斯

○淨御原朝 天武天皇
の御代あり
○序當年之勞云々 當
御代の功勞有るを重く
して次序をかきし天降以
來の古實に據り玉はさ
りしを云ふ

○大寶 文武天皇の御
代の年号あり○記文
神祇官記の始めて成り
しを云ふ○神祇之簿
天神地祇の社名を記せ
る簿と云ふ○案 令の
文案の條解を施行曰
文案の條解と案とあり
案と云ひて稿案と控
に取置くあり○天平
聖武天皇の御代の年号
あり○神帳 天神地祇
の社名帳と云ふ前文に

之胤不能繼其職、陵遲衰微、以至今、至于
淨御原朝、改天下萬姓而分爲八等、唯序、
當年之勞、不本天降之績、其二曰朝臣、以
賜中臣氏命、以大刀、其三曰宿禰、以賜齋
部氏命、以小刀、其四曰忌寸、以爲秦漢二
氏及百濟文氏等之姓、
今東西亦此之條也、至大寶年中、初有記
文神祇之簿、猶無明案、望秩之禮未制、其

神祇之傳有ると異義ありし○小祀 小社と云ふ
 ○敷奏 奏聞する事也
 ○施行 下へ施行するを云ふ○封稅 神地の出賦にて田租の一分は神祇官へ納り一分は其社に貯へしあり○一門 中臣一家を云ふ○履從 後從と云ふ○寶基 天位と云ふ○神器 貞觀政要の注に帝位也と有り○大造は左傳の杜注に造也と有り
 ○功庸 龍氏云國功曰功民功曰庸爾雅陸云有「功庸」者皆勞也○介推 此事卷尾に記さん
 ○懷秘 龍氏云古本「以爲秘」附字、今案於字之爲焉也乎

式至天平年中、勘造神帳、中臣專權任意、取捨有由者、小祀皆列、无縁者、大社猶廢、敷奏施行當時、獨步諸社、封稅總入一門、起自天降泊乎東征、扈從群神名顯國史、或承皇天之嚴命、爲寶基之鎮衛、或遇昌運之洪啓、助神器之大造、然則至於錄功、酬庸、須同預祀典、或未入班幣之例、猶懷秘介推之恨、况復草薶、神劔者、尤是天璽

○日本武尊云々 此尊東夷を征ちて愷旋カハル年より熱山の社に留在マシませると天智天皇の御代の七年に新羅國の道行と云ひし僧僧を奉りて逃んと爲つれを境を出ること能はず神跡は本の如く歸坐し、を云ふ
 ○尊祖敬宗 漢書顏師古が註に祖始也始受命也宗尊也有「德有」行也といへり譬へば藤原氏は津速産靈神を祖とし天兒屋命を宗とするが如し
 ○聖皇登極 登極は即位と云ふに同じ
 ○龍氏云受終文祖嘗舜典正月上日受終于文祖一註受終者堯於「是終」帝位之事、而舜受之也文祖者堯始祖之廟未詳、所指爲何人、也今謂天子御即位受終于始祖之廟、始祖之

自日本武尊愷旋之年、留在尾張國熱田、社外賊偷逃、不能出境、神物靈驗、以此可觀、然則奉幣之日、可同致敬、而久代闕如、不脩其禮、所遺一也、夫尊祖敬宗、禮教所先、故聖皇登極、受終文祖、類于上帝、禋于六宗、望于山川、徧于群神、然則天照大神者、惟祖、惟宗、尊無二、因自餘諸神者、乃子乃臣、孰能敢抗、而今神祇官班幣之日、諸

廟者天照太神宮也終者
 先皇終帝位之事類
 于上帝以下四句亦釋
 典文也曰類于上帝應于
 六宗望于山川備于群神
 註類禮望皆祭名周禮
 肆師類造于上帝註云
 郊祀者祭昊天一之常祭
 非常祀而祭告于天
 其禮依郊祀一爲之故
 曰類如下泰誓武王伐
 商王制言天子將出皆
 云類于上帝是也禮
 精意以享之謂宗尊
 也所尊祭者其祭有
 六祭注曰埋少牢於泰
 昭祭時也相近於坎
 壇祭寒暑也王宮祭
 日也夜明祭月也幽
 宗祭星也雩宗祭
 水旱山川名山大川五
 岳四瀆之風望而祭之
 故曰望禘周禮也群
 謂丘陵墳衍古昔聖賢
 之類言受終觀象
 之後即祭祀上下神祇

神之後叙伊勢神宮所遺二也天照大神
 本與帝同殿故供奉之儀君神一體始自
 天上中臣齋部二氏相副奉禱日神媛女
 之祖亦解神怒然則三氏之職不可相離
 而今伊勢宮司獨任中臣氏不預二氏所
 遺三也凡奉造神殿者皆須依神代之職
 齋部官率御木麩香二鄉齋部伐以齋斧
 掘以齋鉏然後工夫下手造畢之後齋部

以攝位告也
 ○惟祖惟宗云々乃子乃
 臣伊勢大神宮と他の
 諸社とを對へて言へる
 にて祭れる神の上にお
 らず祭神には高皇產靈
 神伊弉諾神なごも坐せ
 り○孰能敢抗抗は抵
 也敢也やご字書に見ゆ
 ○諸神之後云々神祇官
 の班幣は先宮中より
 始めて京中五畿七道と
 次第する故に伊勢は東
 海道あれば京畿の諸神
 より後に在るあり

殿祭及門祭訖乃可御座而造伊勢宮及
 大嘗由紀主基宮皆不預齋部所遺四也
 又殿祭門祭者元太玉命供奉之儀齋部
 氏之所職也雖然中臣齋部共任神祇官
 相副供奉故宮内省奏詞稱將供奉御殿
 祭而中臣齋部候御門至寶龜年中初宮
 内少輔從五位下中臣朝臣常恣改奏詞
 曰中臣率齋部候御門者彼省因循永爲

○主神司 齋宮寮中に
て神事を主る職也○延
暦 桓武天皇御代の年
號也○朝原内親王 桓
武天皇の皇女にて豐樂
入姫命より二十五代に
當り給ふ齋宮にましま

後例于今未改所遺五也又肇自神代中
臣齋部供奉神事無有差降中間以來權
移一氏齋宮寮主神司中臣齋部者元同
七位官而延曆初朝原内親王奉齋之日
殊降齋部爲八位官于今未復所遺六也
凡奉幣諸神者中臣齋部共預其事而今
太宰主神司獨任中臣不預齋部所遺七
也諸國大社亦任中臣不預齋部所遺八

○鎮魂之儀者云々 鎮
魂祭は天鈿女命の供奉
し備されば必其裔たる
御巫を任し給ふべしと
也○御巫 職員令集解
云巫者知鬼神之道一者
也云々

○齋部之官 中臣と並
べて神祇官に置かる、
齋部の官人あり

○考選 其人の才徳功
績等を考へ選びて官職
に任ずる事あり

○勝寶九歲 孝謙天皇
の御代あり

也凡鎮魂之儀者天鈿女命之遺跡然則
御巫之職應任舊氏而今所選不論他氏
所遺九也凡造大幣者亦須依神代之職
齋部之官率供作諸氏准例造備然則神
祇官神部可有中臣齋部媛女鏡作玉作
盾作神服倭文麻績等氏而今唯有中臣
齋部等二三氏自餘諸氏不預考選神裔
亡散其葉將絕所遺十也又勝寶九歲左

り○庸夫 凡庸なを熟してつねあみの夫を云ざるべし又備とも通へば庸人などの賤しき者の意にもあるべし○幸遇は求訪之休運 序に幸蒙召問と云へると同じく我家に遣り傳はれる故實を召問給ひしを云ふ龍氏云休運、好時節也○口實 序に所聞口々に傳へたる故實を云ふ○庶斯文之高遠 龍氏云庶幾于運、獻聞也高遠、天鑿、共、係、獻聞也○曲照 藤齋延云上文選註表曰伏願鶴茲曲、垂、照覽

○本文のかみに記すべきを挾くて之物をせざるしよしよしをこゝに
○世代 神皇正統云第十四代第十四世仲哀天皇は日本武尊第二の子景行の御孫あり云々大祖神武より第十二代景行までは代のまゝに繼跡し玉ふ日本武尊世をばやくし給ひしにより成務是を繼給ふ此天皇を太子としてゆづりましまししより代と世とかはれたるははじめあり云々

○迎引皇舟表 續香山之嶺 天皇遺吸之門に至りませる時國、神珍彦迎奉りければ汝能爲我導耶と問ひたまふに導奉らんと對ふ由て推櫓の末を執らへしめく皇舟に奉入れ海の導者と爲たまひ名を推根津彦と賜ひたまふた天皇の御夢に神の告ありて香山の土を取らん爲に推根津彦と弟精とを遣はし給ふ時に推根津彦乃前之曰我皇當能定此國一者行路自通若不罷者賊必襲と云ひて行くに賊ども道を閉きて行かしめさ此よ山りて香山に登り墳を取りて歸りし事あり表續は功績を願はし、也舊事紀に詔推根津彦曰汝迎引皇舟表續香山之嶺因譽爲倭國造云々此則大倭連等禮也と見たり

○八咫鳥者奉導宸駕一顯瑞菟田之徑天皇紀伊國より大和國へ入給はんとするに山中巖絶て行くべき路無かりし時天照大神の御告ありて朕今遣頭八咫鳥一宜以爲嚮導者一と宜ひしに果して頭八咫鳥ありて空より飛降りければ其鳥の向ふまゝに隨行きて遂に菟田(宇陀郡也)に出給ひしと云へり

○懷秘介推之恨 晉史云獻公嬖驪姬殺太子申生伐重耳於蒲重耳は獻公の次子也重耳出奔而後返國嘗餒於曹介子推割股以食之及歸賞從亡者云々而不及子推云々公曰噫寡人之過也使入求之不得驪錦上山中焚其山子推死云々龍氏云撰者謂上古有功者須預禮典班幣之例然遺而不祀猶如介子推有割股之忠而賞祿不及焉

明治廿四年一月廿一日印刷
一月廿五日出版

定價二十五錢



大阪府平民
 印 兼 森 本 專 助
 發行 者 東區南本町四丁目五十番屋敷
 兼 小 田 清 雄
 校 註 者 大阪府下堺市大町東三丁目四十四番屋敷
 集 註 者 國 文 館
 製 本 所 大阪東區瓦町二丁目六十六番屋敷
 賣 捌 所 松 村 九 兵 衛
 同 南區心齋橋筋壹丁目六十七番屋敷
 同 築 城 勇 助
 同 東區博勞町四丁目廿九番地
 同 前 川 善 兵 衛
 同 東區南久寶寺町四丁目十九番屋敷
 同 赤 志 忠 七
 同 東區本町四丁目卅一番屋敷

同

鹿田靜七

東區安土町四丁目十五番屋敷

西京大賣弘所

藤井孫兵衛

西京御幸町姉小路北入

同

村上勘兵衛

同 東洞院三條上ル

同

福井源治郎

同 三條通寺町東入

東京大賣弘所

吉川半七

東京南傳馬町壹丁目

同

大倉孫兵衛

同 日本橋通壹丁目

同

小林喜右衛門

同 大門通新大阪町

同

林平治郎

同 日本橋區箔屋町八番地

